

「裏日本」の形成と伝統の発明  
—地域の新しい自己像のために—

渡 邊 太

Futoshi WATANABE : The Social Construction of “Ura-Nihon” and the Invention of Tradition:  
Toward an Alternative Regional Identity

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第81号 抜刷

2020年7月

# 「裏日本」の形成と伝統の発明 —地域の新しい自己像のために—

渡 邊 太<sup>1</sup>

Futoshi WATANABE : The Social Construction of “Ura-Nihon” and the Invention of Tradition:  
Toward an Alternative Regional Identity

本研究は、産業化に成功した「表日本」に比べて停滞・後進性を刻印された「裏日本」の否定的なアイデンティティを肯定的に転換することを目的とする。日本近代化における「裏日本」の歴史的形成過程を明らかにした上で、歴史学における「伝統の発明」の観点から、ポスト冷戦体制下での「環日本海」構想を読み解く。さらに「伝統」の社会変動論的解釈を通じて、オルタナティブな「裏日本」の自己像を提示する。

キーワード：近代化 裏日本 環日本海 伝統の発明 文化

## はじめに

日本海側は、かつて「裏日本」と呼ばれ、産業化が進んだ「表日本」である太平洋側に比べて、社会経済的に遅れた後進地域とみられてきた。否定的な烙印は地域に生きる人びとの自尊心を毀損し、後進と停滞を諦念として受容させる宿命論を導く。

後進・停滞という否定的な意味あいを強く感じさせる「裏日本」という言葉は、1960年代から公の場では使用が控えられたが、実態として太平洋側との社会経済的格差はいまも大きいといわざるを得ない。たとえば、日本の初期近代化当時の鉄道敷設状況をみると、太平洋側にいち早く交通網が整備されるのに比べて日本海側の鉄道網の発達は大きく遅れた。今日も山陰本線はいまだ単線非電化区間がつづき、公共交通としての利便性が制約されている現実がある。「裏日本」とされた地域に生きる立場からすれば、かかる現状を自己責任論的に捉えるのではなく、大きな政治の枠組みで理解する必要性に駆ら

れる。

本稿では、否定的に捉えられてきた「裏日本」のアイデンティティを見直すことで、肯定的なアイデンティティの可能性を探りたい。以下、先行研究を手がかりとして「裏日本」が形成されてきた歴史的経緯を明らかにした上で、1990年代後半から「裏日本」についての新しい視点を提示した「環日本海」構想に注目する。そして、歴史学の「伝統の発明」概念を用いて、「裏日本」と「環日本海」がいずれも社会変動期にアイデンティティ統合の装置として機能したことを示す。その上で、「裏日本」を肯定的に捉える新たな「伝統の発明」として、地域の芸術・文化の豊かさに目を向けたい。

## 1. 「裏日本」の形成

太平洋側の「表日本」に対して、日本海側の「裏日本」が社会経済的にみると発展が遅れた歴史的過程について、歴史地理学の観点から先駆的に論じたのは、千葉徳爾の論文「いわゆる『裏日本』の形成について——歴史地理的試論<sup>1)</sup>である。千葉によれば、明治30年代には「裏日本」の言葉が一般的

1 鳥取短期大学国際文化交流学科

に使用されていたものの「停滞や遅れのイメージは含まれていなかったが、明治末から大正末までの間に「表日本」と「裏日本」の経済格差が拡大し、停滞した「裏日本」のイメージが定着したとする。千葉は、「裏日本」の経済的發展が遅れた要因を探るために東海と北陸の産業を比較し、「地域社会の近代化への志向」が「裏日本」と「表日本」で異なるという見解を提示した<sup>2)</sup>。

千葉によれば、社会制度として遅れた形態である北陸地方の寄生地主制による生産改良への消極性や、固定市場への販売に特化しがちな工業生産の工芸品化志向は、「表日本」にあらわれた経済發展を志向する企業精神がついに「裏日本」では生まれず、結果として経済的に遅れをとる原因となったのである。千葉は続編の論文でも内在的な要因に着目し、直取引が多い北陸の商取引慣行が大量生産市場の成立を阻害したと論じている<sup>3)</sup>。

歴史学者の阿部恒久は、千葉徳爾の研究を先駆的業績として評価しつつも、二つの点で異議を申し立てる<sup>4)</sup>。第一に、経済的・社会的格差の形成が千葉説よりも早くから始まり、したがって「裏日本」という言葉にも初期から差別的観念が含まれていたとする点。第二に、「裏日本」の歴史的形成の原因は、国家による社会資本整備の不平等政策にあるとみる点である<sup>5)</sup>。

第一の点について、阿部はまず、明治期地理書の文献調査から「裏日本」という言葉が最初に登場する教科書は1895年刊行の矢津昌永著『中学 日本地誌』であることを突きとめる。「裏」と「表」という語法の由来としては、地質学で弧を描く山脈の凸面を「外面」、凹面を「内面」と呼ぶことから、日本列島の弧の外側（太平洋側）を「外帯」、弧の内側（日本海側）を「内帯」と称することが多く、転じて「表面」「裏面」になったと考えられる。阿部は、「外／内」という中立的な語法が「表／裏」と価値づけられた語法に転換した背景に、太平洋側に対する日本海側の「立ち遅れ」についての認識が影響したと推測する<sup>6)</sup>。阿部によれば、千葉の指摘よりも

早く、すでに1900年頃から「裏日本」という言葉は地域格差を意味する概念として使用されていた。ただし、教科書類では「裏日本」という言葉は自然地理の概念として用いられる場合がほとんどで、結果として地域格差をあらわす観念としての「裏日本」の意味を隠蔽することになったのである。

第二の点について、阿部は殖産興業政策の地域分布、鉄道の建設状況等を検討した結果、明治政府による地理的に偏った社会政策によって1890年前後から日本海側の「裏日本」化が進められたと結論づける。さらには、官僚エリートを育成する官立高等教育機関も太平洋側に偏り、地域格差がますます明確化するなかで、「『裏日本』であるがゆえに『裏日本化』を促進するという、絶望的な地域格差構造の成立」<sup>7)</sup>に至った。

千葉は、「裏日本」の住民に特有の企業精神の欠如を「裏日本」化の原因として捉えたが、それに対して阿部は地理的に偏った国策によって「裏日本」がつくられたと捉える。

「富国強兵」を最優先させる立場からすれば、「上から」の資本主義化を近世までに培われた近畿・関東など比較的生産力が高い地域に依拠して行うことは一面の合理性を有するといえる。だが、その結果、著しい地域格差を生むとしたら、その政策は民衆の利益に適うものとはいえない<sup>8)</sup>。

さらに阿部は、千葉が遅れた社会制度として指摘した寄生地主制がむしろ政府の産業育成政策と、過酷な税収奪とデフレーションを内容とする財政政策の結果として形成されたと論じる<sup>9)</sup>。遅れた社会制度とみなされた大地主制は、むしろ近代化の結果と考えられるのである<sup>注1)</sup>。

古厩忠夫も「裏日本」の形成が明治政府の地理的不平等政策に由来すると論じている<sup>10)11)</sup>。古厩によれば、「太平洋側に比して日本海側が差別され、格差があるという実態」は、「日本の近代化のなかで

産み落とされた政治的産物」である<sup>12)</sup>。明治初期まで北陸・山陰地方は農業や手工業が発展し北前船の貿易も盛んだったが、明治20年代からの産業革命によって、構造変動が生じる。「表日本」に対して重点的な資本投下が進められ、鉄道、港湾、工業、軍事拠点、教育拠点が太平洋側に建設された。その結果、「裏日本」から「表日本」へのヒト・モノ・カネの移転システムが完成する<sup>注2)</sup>。

古厩は、I・ウォーラステインの世界システム論を援用し、「裏日本」の歴史的形成を論じている。ウォーラステインは、資本主義システムの発展が非対称的な空間の構造化をとまなうことを指摘している。すなわち、資本投下が集中する中心と、経済発展から取り残される周辺の序列化が進展し、中心地域が周辺地域からの収奪によってますます発展するという格差の拡大・強化メカニズムが資本主義システムには埋め込まれているのである<sup>13)</sup>。日本の場合、周辺化された「裏日本」からの収奪が「表日本」という中心の発展を支えるという構造である<sup>注3)</sup>。

## 2. 「裏日本」イデオロギー

近代化の過程で、ヒト・モノ・カネの移転システムが完成し、「表日本」による「裏日本」の収奪が構造化された。かかる構造に対応する観念の複合体を古厩は「裏日本イデオロギー」と呼ぶ。

「裏日本」という語を外部から使用するとき、それは格差を自然的・気候的要因で隠蔽するとともに、より本質的には経済効率主義の観点から地域的「分業」を合理化しようとする意識を内包する。自己意識として表現するとき、それは立ちおくれへの劣等感を背景とし、一面でそれを自然条件に結びつける宿命観として内向するが、外に向かうとき、それはおくれを不当で不平等な扱いによるものとする反発・叛逆、および格差是正の行動を正当化しようとする感情のアマルガムを形成する<sup>14)</sup>。

「裏日本イデオロギー」は、日本海側と太平洋側の経済的格差の原因を自然化することで正当化し、停滞・後進性の責任を「裏日本」の住民に帰属させることで中央政府を免責するものである。ときに、「米騒動」のようなかたちで外向的に爆発することもあるが、多くの場合、宿命論的に地域格差を甘受する諦観を育んだ。

「裏日本」からの脱却は、近代化を通じて日本海側に暮らす人びとの悲願だった。戦前において「表日本」に対する憧憬と劣等意識が醸成されるなか、1930年代からの帝国日本の軍事拡張路線は「裏日本」の人びとにねじれた希望を抱かせることになる。古厩は、「満州事変」（1931年）と同年に上越線が全通したことを象徴的な事件と捉える<sup>15)</sup>。「東京」と「新京」（満州）という二つの「帝都」を結ぶ最短ルートが通じたことは、「裏日本」が「裏アジア（半島・大陸）」に対する「表アジア（日本）」の玄関口となったことを意味したのである。

日本海を一つの大きな内海と捉える「日本海湖水化」が論じられ、大陸進出が「裏日本」からの脱却の希望となった。だが、実際には「表日本」の優位は揺るがず、「裏日本」はヒト・モノ・カネの供給源という役割を担いつづけた。結果として、「裏日本イデオロギー」は帝国日本の軍事拡張路線に利用されたのである。

戦後も、全国総合開発計画（1962年～1987年）において太平洋ベルト工業地帯の開発が進み、不均等発展は継続された。新潟出身の政治家・田中角栄は『日本列島改造論』<sup>16)</sup>を著し、都市の過密と地方の過疎の同時解消と地域格差の是正を主張したが、全国を「総表日本化」する計画自体に無理があり、挫折した。結果的として、日本海側には火力発電所、原子力発電所、石油備蓄基地などが置かれ、太平洋側へのエネルギー供給（モノの移転）の役割が強化されている。

石塚正英は、21世紀になおつづく「裏日本」の現実として、日本海側に乱立する原子力発電所をあげる。「原発はなぜ必要とされてきたか。それは『表

日本』を中心にすすむ重厚長大型経済発展をエネルギー面で支えるためである」<sup>17)</sup>。「裏日本」からの脱却は日本海沿岸地域の悲願だったが、そのつど中央に利用される歴史がくり返されてきた。

### 3. 「環日本海」の視点

1990年代、東西冷戦体制が解体に向かうなかで、「環日本海」地域がにわかに脚光を浴びる<sup>18)</sup>。「環日本海」とは、日本海を内海と見立て、(当時の)ソビエト連邦、中華人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国、日本をひとつながりの地域として捉える視点である。

そもそも、「裏日本」の発展のために対岸との交易を視野に入れた日本海への注目は、既に1960年代に始まる。1964年に日本海沿岸振興連盟が結成され、「日本海時代」が唱われた。以降、自治体レベルでソ連、中国、朝鮮半島両国との交流が地道にすすめられてきた<sup>18)</sup>。経済界では藤間丈夫が1967年から日本海圏経済研究会の母体となる研究会を開始し、日本海運動を提唱している<sup>19)</sup>。

1970年代になると、日本海を主題とする地域研究が組織化され、日本海学会が発足する<sup>20)</sup>。歴史学では、網野善彦が1980年代から海のルートに着目し、律令国家成立以来の陸路を中心とした日本史観を相対化し、日本海の活発な海上交通が列島の文化に与えた影響を強調した<sup>20)</sup>。また、浅香年木によれば、「日本海文化史」の出発点は、下出積与・佐口透による『北国新聞』の連載「日本海文化史物語」(1967年)であり、その後着実に研究を積み重ねて1980年代に学問としての市民権を確立する<sup>21)</sup>。

1990年代の「環日本海」への注目においては、とりわけ経済圏への期待が膨らんだ。冷戦体制下では、対岸の社会主義諸国との緊張から経済交流の実現は難しかったが、冷戦の「雪解け」とともに現実味が増す。1992年の経済企画庁の報告書は、日本海が冷戦時代の「緊張の海」から「交流・協力の海」へ変化したことから、「環日本海」経済圏を展望している。

そこでは、「環日本海」の経済的ポテンシャルとして、①資源、土地の宝庫であり大きな開発可能性を有すること、②现阶段では資源、資本、労働力、市場等が偏在しているが有機的に結合すれば経済成長のダイナミズムが期待できること、③国家ではなく地域主導の経済圏であることが指摘されている<sup>22)</sup>。また、金森久雄は、「環日本海」経済圏の特徴として、①日本海という内海に面した近い国の集まりであること、②歴史的・文化的つながりが深いこと、③無限の天然資源が存在することをあげている<sup>23)</sup>。

「環日本海」の視点は、「裏日本」を停滞・後進地域とする「表日本」中心主義を相対化し、対岸諸国とのつながりを強調することで、新しい日本海地域の像を力強く提示するものだった。ただし、「環日本海」のビジョンは楽観視しすぎてもいけない。韓国の経済学者・金泳鎬は、日本海を「五重苦の海」として次のように規定していた。①東西対立が激しく爆発し、かつ現在に至るまで対立が残る地域であること、②南北問題として日本と他のアジア諸国の格差が大きいこと、③戦前の歴史的問題が精算されていないこと、④「環日本海」地域はいずれも沿岸諸国の周辺地域であること、⑤公害が集中する地域であること<sup>24)</sup>。

歴史の清算については、1994年に発足した環日本海学会の設立趣意書でも、「日本が戦後処理を完遂しないままに経済的成功をおさめ、既に国民の間には大国意識が芽生えていること」に対する危機感が表明された上で、「とりわけ環日本海地域にあって、その平和、協力、発展をはかるためには、各国国民の歴史認識の共有が重要であり、そのためにも真実を追及し、未来を展望、検討、討議する学会が必要であると考え」と述べられている<sup>25)注6)</sup>。「環日本海」が「『大東亜共栄圏』の再版」<sup>26)</sup>となることへの警戒心は周辺諸国に根強くある。

「環日本海」のアイデアには、近代化を相対化する視点が含まれていた。近代化の過程で「裏日本」の烙印を押された日本海沿岸地域は、古来、海の道を通じて半島・大陸との豊かな交流を結んだ地域

だったのである。近代化と日本の植民地支配、さらに戦後の東西冷戦体制のなかで、「交流の海」は「緊張の海」となった。だが、それは近代的一幕にすぎない。「環日本海」への注目は、近代以前の「交流の海」を新たな時代の息吹のなかで再発見したのである。

時代を大きく遡ると、縄文時代の結合式釣針は、韓国から九州北西部に渡ったと推測されている<sup>27)</sup>。弥生時代末から古墳時代に山陰地方で築かれた「四隅突出型方墳」は、高句麗時代の石塚との類似が指摘されている<sup>28)</sup>。さらに古墳時代の出土品からも、日本海を通じた列島と半島・大陸の往来が窺える。林屋辰三郎は、青銅器文化の伝来経路として朝鮮半島東岸から山陰・北陸道にいたる環日本海ルートを推定し、「日本海文化」形成の端緒ととらえている<sup>29)</sup>。

中世の北陸地方は日本海交易の最前線として繁栄し、列島の外ともつながっていた<sup>30)</sup>。日本海沿岸地域を結ぶ北前船は、「裏日本」形成の国策が確定する以前の明治初期に最盛期を迎えている<sup>31)</sup>。

高橋公明は、日本海沿岸に掲げられた、「不審船」への警戒を呼びかける警察の看板こそ対岸との断絶を象徴するものであり、そうした国際関係のあり方が「裏日本」化を固定してきたと指摘する<sup>32)</sup>。海の道を通じた沿岸諸国の交流を阻むのは、自然的条件ではなく、むしろ政治的思惑に彩られた人為的条件なのである。

「環日本海」構想が目に向けた「交流の海」は、21世紀に入ると、再び人為的条件によって制約される。1992年から新潟と元山（朝鮮民主主義人民共和国）のあいだを結んでいた航路は、日本政府による2006年の経済制裁を機に運航停止した。境港市と元山市との友好都市盟約も2006年に破棄された。

さらに2019年には、韓国大法院において元徴用工が日本企業に損害賠償を求めた裁判で支払いを命じる判決が確定したことに対して、日本政府が報復措置をとったことから両国の対立ムードが煽られ、ついに訪日韓国人観光客が減少し、富山空港、小松空港、米子空港など、日本海沿岸の地方空港で韓国

便が運休するに至った。「環日本海」交流の道はなお険しい段階にあるといわざるをえない<sup>注7)</sup>。

#### 4. 伝統の発明

ここまで、日本近代化の過程で「裏日本」が歴史的に形成されたこと、20世紀末に東西冷戦体制が揺らぐなかで「環日本海」への期待が高まったものの、「環日本海」の交流と発展はいまだ十分ではないことを確認した。停滞した「裏日本」というイメージは、近代社会のなかで形成された社会的構築物であるが、日本海側に暮らす人びとにとっても「裏日本イデオロギー」という形で内面化されている。

ここで、「裏日本」の形成を「伝統の発明」の問題として考えたい。英国の歴史学者E・ホブズボウムらは、長い歴史をもつと思われている「伝統」がむしろ往々にして近代の発明品であることを指摘し、とりわけ国民国家やナショナリズムの成立に際して「伝統の発明」が活用されたことを強調する<sup>33)注8)</sup>。大きな社会変動をともなう近代化の過程で、動揺する社会意識を統合するために、「伝統」を「発明」することが必要とされたのだ。

「裏日本」の形成は、日本の近代化における「伝統の発明」であった。それは、限られたリソースを太平洋側に集中的に投下することで急速な近代化を実現する一方で、後進的・停滞的な「裏日本」を近代化の産物としてつくりだし、さらに「裏日本イデオロギー」として停滞と後進性を宿命論的に受容させる効果をもたらした。これに対して、「環日本海」の視点は、近代以前の海の往来を想起させることで、「裏日本」の否定的な印象をくつがえす、新たな「伝統の発明」として捉えることができる。

いま振り返ると、冷戦体制の解体という世界史的過程のなかで多分に経済発展への期待に引きずられた側面が強かった「環日本海」の構想ではあったが、それでも近代以前の豊かな海の交流を強調することで、「裏日本」として貶められてきた地域の新しい像を描いたことは新鮮だった。日本海側に暮らす人

びとが、自分たちの現状を宿命論的に受け入れることを求められてきたなかで、地域の新しいアイデンティティを提示したことは極めて重要である。

社会学者の塩原勉は、「伝統の発明」概念を社会の内発的発展のプロセスに位置づけている<sup>34)</sup>。塩原は、柳田國男の民俗学を社会変動論として読み込んだ鶴見和子の内発的発展論を評価した上で、内発的発展と外発的変革をともに捉える社会変動の枠組みを提示する。社会変動には、「ゆっくりとした変化のテンポ」で「生活文化のアイデンティティを保持しながら環境の変化にも適応していくプロセス」である内発的な〈evolution〉と、外来文化に直面して「キーパーソンたち」が遂行した外発的な〈revolution〉という二つのプロセスがある。塩原は、相異なる二つのプロセスを馴化させる装置として「伝統の発明」を位置づける<sup>35)</sup>。

「伝統の発明」は、変化への適応と生活文化のアイデンティティ維持のあいだを架橋する。環境変化への適応のために、まったく新奇のアイデンティティを身につけることは至難だが、慣れ親しんだ生活文化との連続性が感じられれば、新たな変化も受容しやすいものとなる。「伝統」が過去と未来を媒介するのである。

塩原によれば、「伝統の発明」には、①必要なものを取捨選択する、②選択したものと既存の伝統を折り合わせるために新たな解釈図式を発明する、③発明された解釈図式を伝統として定着し社会的に統合する、という三段階が必要となる<sup>36)</sup>。「伝統の発明」は〈選択—発明—統合〉のプロセスであり、集団の成員は、何を次世代に伝え継ぐかを真摯に選び取るのである。

「環日本海」の概念は、日本海側という地理的条件を開かれたものと位置づけ、過去の交流に目を向けることで北東アジアの未来を近隣諸国と友好的に築くことをめざす「伝統の発明」であった。政治情勢により「環日本海」の交流は困難が続くものの、日本海が「断絶の海」だった時代はむしろ例外的であり、対岸の交流という伝統は受け継がれるべきで

ある。

「裏日本」における、もう一つの「伝統の発明」として、文化・芸術にかかわる活動もここで強調したい。鳥取大学のギンナン・アレクサンダーは、自然環境の厳しさや過酷な肉体労働などに焦点をあてた濱谷浩の写真集『裏日本』<sup>37)</sup>にみられる一面的な「裏日本」イメージに対して、日本海側にも多様な創造的活動がみられた事実を指摘し、写真家の塩谷定好や植田正治、画家の角護や佐藤真菜など鳥取在住の作家が描く地域の表象に注目している<sup>38)</sup>。

私たちが暮らす鳥取では、近代化以降も文化・芸術が豊かに培われてきた<sup>注9)</sup>。1920年に結成された「砂丘社」は鳥取の近代美術を代表する芸術団体である。東京美術学校で学び帰郷して倉吉中学に勤めた中井金三のもとに、前田寛治、前田利三、河本緑石らが集い、油絵や水彩画の展覧会を開くだけでなく、文芸や音楽にも取り組もうという意欲あふれる活動を展開した<sup>39)</sup>。

鳥取は民藝運動も盛んである。鳥取市の医師・吉田璋也は、柳宗悦の盟友として県内の民藝運動を牽引した。吉田璋也を介して、柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎ら民藝の創始者たちと出会った長谷川富三郎は、物と心の相関関係に関心を抱き、倉吉の明倫小学校で教員として勤めながら民藝を活かした教育に取り組んだ。長谷川は「砂丘社」の同人として油絵を描いていたが、戦後は棟方志功の勧めで板画を始め、生涯にわたって膨大な作品を制作し、その作品は市中で親しまれている。

倉吉中学で絵画部に所属し中井金三に教わった徳吉英雄は、長谷川や後に染織家として知られる吉田たすくらの協力を得て、敗戦翌年に同人誌『意匠』を発刊し、郷土文化の向上をめざした。徳吉は、高木啓太郎の写真クラブに所属し、よく近場の寺社の撮影に一緒に出かけていた。

高木啓太郎は戦前に大陸に渡り、シベリア抑留を経て帰国後カメラ店を始める。芸術写真で全国的に著名な植田正治とも交流し、鳥取各地の民俗行事や民俗風景を撮影した。倉吉博物館に寄贈された3万

余点に及ぶ膨大な民俗写真は記録として重要であるだけでなく、芸術写真としての価値も認められる。高木は写真だけでなく墨絵、俳句、書、泥佛など多彩な才能をみせ、総合芸術家の様相を呈する。

高木が大山参道のお地蔵様を撮影した写真集『新雪地蔵』<sup>40)</sup>は、長谷川がカット板画と装幀を担当し、いわば両者のコラボレーション的作品となっている。写真集の出版を高木にすすめたのは長谷川だった。高木が経営するカメラ店、喫茶、そば屋は民藝の愛好者、芸術家らが集うサロンのな場となっていた<sup>41)</sup>。

簡単に紹介しただけでも、鳥取の芸術運動がジャンルを超えたインターセクショナルな特徴をもつことが窺える。こうした作家たちの営みによって、郷土の文化は豊かに生まれ、現在に受け継がれている。これも「裏日本」の一面として見直され、誇るべき「伝統」である。

## おわりに

「裏日本」は、19世紀末から20世紀初頭にかけて日本政府による地域不均等な近代化政策によって歴史的に形成された。後進的・停滞的な現実を、「裏日本イデオロギー」として宿命論的に受容され、「裏日本」からの脱却を願う意欲は北東アジア侵略のエネルギーとして利用された。戦後も「裏日本」は「表日本」に労働力、食糧、エネルギーを供給する役割が期待され、経済発展の不均等な構図は維持された。

日本海側が後進・停滞の宿命にある、というのは近代日本における「伝統の発明」である。実際には、中央政府による選択的な資源配分の結果として、後進と停滞が日本海側に押しつけられたのである。

1990年代の「環日本海」構想は冷戦体制の「雪解け」を機に、近代以前の「交流の海」の伝統を想起して未来の沿岸諸国との交流をめざすものだった。その後頓挫しつつあるとはいえ、「環日本海」の概念は、激動の時代のなかで新たな「伝統の発明」として重要であり、いままアクチュアルである。

さらに日本海側には、「裏日本」が刻印された近代化の過程のなかでも独自の豊かな芸術と文化の営みがみられた<sup>註10)</sup>。郷土の豊かな文化に目を向けることは、押しつけられた自画像を拒否して、オルタナティブな自己像を創造する営みの初歩である。

強いられた「伝統の発明」から、意志的に選り出した「伝統の発明」へ移行することで、私たちは現代の文脈から郷土の豊かな文化をあらためて見直したい。

## 注

- 1) 古厩忠夫も、新潟県の「地主王国」化は近代化の産物であることを指摘している<sup>42)</sup>。
- 2) ヒトの移転は労働力の移動を、モノの移転は食糧・エネルギー資源の輸送を、カネの移転は税制を通じた資金の吸収をそれぞれ意味する。
- 3) さらに古厩は、北陸と北海道の関係を例として、「表日本」=中心、北陸=半周辺、北海道=周辺という図式から、北陸の従属的工業化について論じている<sup>43)</sup>。
- 4) 21世紀の現在においてなお朝鮮半島の分断が継続する東アジアでは、冷戦体制の「終焉」と安易に書くことはできない。
- 5) 豊島吉則によれば、日本海学会は1976年に金沢で第1回大会を開き、1987年小樽での大会を最後に、大会が開かれていない<sup>44)</sup>。
- 6) 環日本海学会は、2007年12月の総会で北東アジア学会へ名称を変更した。
- 7) 金泳鎬は、「戦前のことをうやむやにしてしまいうかたちで戦後を決算しようとする立場での『環日本海』の概念がある」<sup>45)</sup>と指摘していた。植民地支配の問題と向きあうことなく「環日本海」を言祝ぐことは、御都合主義にほかならない。「環日本海」の挫折は、日本の歴史認識問題の帰結である。
- 8) マルクス主義歴史家としてホブズボウムの議論はナショナリズム批判の色彩が強いが、本来、「伝統」の母体は国民国家だけには限られない。
- 9) 新潟や北陸も文化の豊かな風土だが、「裏日本」

全域の文化・芸術を網羅することは手に余るため、本稿では著者が住む鳥取に限定して論じ、他の地域は今後の課題としたい。

10) 筒井宏樹は、鳥取で1960年代末から1970年代にかけて砂丘や湖山池で野外展を試みた前衛芸術集団「スペース・プラン」の活動を発掘・検証し、同時代の文脈と関連づけて考察している<sup>46)</sup>。こうした研究は、郷土の文化を再発見する営みとして今後ますます重要となるはずである。

#### 引用・参考文献

- 1) 千葉徳爾「いわゆる『裏日本』の形成について——歴史地理的試論」『歴史地理学紀要』第6号(1964), pp. 165-180.
- 2) 前掲1), p. 173.
- 3) 千葉徳爾「いわゆる裏日本の形成について(第二報)——商品取引組織からみて」『歴史地理学紀要』第8号(1966), pp. 91-106.
- 4) 阿部恒久『「裏日本」はいかにつくられたか』日本経済評論社, 1997.
- 5) 前掲4), pp. 5-6.
- 6) 前掲4), p. 36.
- 7) 前掲4), p. 195.
- 8) 前掲4), p. 100.
- 9) 前掲4), p. 223.
- 10) 古厩忠夫『裏日本』岩波書店, 1997.
- 11) 古厩忠夫「日本海『三つの過去』」武藤誠・北川フラム編『つながる日本海——新しい環日本海文明圏を築くために』現代企画室, 2007, pp. 37-61.
- 12) 前掲10), p. 6.
- 13) I・ウォーラーステイン(川北稔訳)『史的システムとしての資本主義 新版』岩波書店, 1997, pp. 31-32.
- 14) 前掲10), p. 183.
- 15) 前掲10), p. 134.
- 16) 田中角榮『日本列島改造論』日刊工業新聞社, 1972.
- 17) 石塚正英「なぜ今、『裏日本』か」NPO法人頸城野郷土資料室編『「裏日本」文化ルネッサンス』社会評論社, 2011, p. 15.
- 18) 内藤正中編『鳥根県の環日本海交流——地域からの国際化』今井書店, 1993.
- 19) 藤間丈夫『動き始めた環日本海経済圏』創知社, 1991.
- 20) 網野善彦『海と列島の中世』講談社, 2003.
- 21) 浅香年木『茜さす日本海文化——北陸古代ローマンの再構築』能登印刷, 1989.
- 22) 経済企画庁総合計画局編『環日本海時代と地域の活性化——日本海沿岸地域の特色ある発展に向けて』大蔵省印刷局, 1992.
- 23) 金森久雄「序文」藤間丈夫『動き始めた環日本海経済圏』創知社, 1991, pp. 1-4.
- 24) 金泳鎬「環『日本海』二つの道」多賀秀敏編『環日本海叢書1 国境を超える実験——環日本海の構想』有信堂, 1992, pp. 61-73.
- 25) 「環日本海学会設立趣意書」『環日本海研究』第1号(1995), pp. 1-2.
- 26) 前掲10), pp. 187-188.
- 27) 門田誠一「古代出雲と朝鮮半島の交流」網野善彦他編『海と列島文化2 日本海と出雲世界』小学館, 1991, pp. 279-280.
- 28) 前掲27), pp. 281-282.
- 29) 林屋辰三郎『「日本海文化」の形成』日本海史編纂事務局編『日本海地域の歴史と文化』文献出版, 1979, pp. 329-341.
- 30) 前掲20), p. 111.
- 31) 鹿野政直「日本海地域の近代」鹿野政直編『明治大正図誌13 日本海』筑摩書房, 1979, pp. 131-136.
- 32) 高橋公明「中世西日本会地域と対外交流」網野善彦他編『海と列島文化2 日本海と出雲世界』小学館, 1991, pp. 341-363.
- 33) E・ホブズボウム&T・レンジャー(前川啓治他訳)『創られた伝統』紀伊國屋書店, 1992.
- 34) 塩原勉『転換する日本社会——対抗的相補性の

- 視角から』新曜社, 1994.
- 35) 前掲 34), pp. 29-30.
- 36) 前掲 34), p. 29.
- 37) 濱谷浩『裏日本——濱谷浩写真集』新潮社, 1957.
- 38) ギンナン・アレクサンダー「視覚文化と『裏日本』の地域表象」『日本学報』37号(2018), pp. 35-52.
- 39) 倉吉博物館編『パークスクエアオープン記念特別展 ザ・倉吉博物館』倉吉博物館発行, 2001.
- 40) 高木啓太郎『新雪地蔵——伯耆大山参道』民芸, 1969.
- 41) 渡邊太「郷土の芸術と記憶の継承: 令和元年度 鳥取看護大学・鳥取短期大学 地域研究・活動推進事業助成金 報告」『グローバル』(鳥取看護大学・鳥取短期大学グローバルセンター年報) 第3号(2020), pp. 44-45.
- 42) 古厩忠夫「『裏日本』と寄生地主制」鹿野政直編『明治大正図誌 13 日本海』筑摩書房, 1979, pp. 137-142.
- 43) 前掲 10), pp. 64-65.
- 44) 豊島吉則「環日本海時代と『日本海学会』の活動」『北東アジア文化研究』第1号(1995) pp. 59-63.
- 45) 前掲 24), p. 67.
- 46) 筒井宏樹編『スペース・プラン: 鳥取の前衛芸術家集団 1968-1977』アートダイバー, 2019.